

## 地中海地域比較教育学会（MESCE）基調講演で話したこと

堀尾 輝久

2012年10月、チュニジアでの国際学会で基調講演を求められ、「地球時代の価値と教育の課題——平和、人権、共生」と題して話した。原題は“Valeurs et enjeux de l'éducation à l'ère planétaire---paix, droits de l'homme, kyosei(vivre ensemble)”。フランス語での講演は久しぶりのことだった。学会の正式名は「地中海地域の比較教育学会」というのだが、地中海地域という言葉の持つ世界史的意味について学び直すよい機会でもあった。ブローデルの名著『地中海』も読み直した。前年の「アラブの春」の起点としてのチュニジアへの関心もあっての参加であった。

私は地球時代の定義、その始まりとしての1945年、そしてあの大戦争の終結と国連憲章、世界人権宣言に始まる新しい世界秩序へ向けての動きについて述べ、日本国憲法とりわけ前文、9条の日本にとっての意義と世界史的意義を強調した。国際軍縮教育会議の流れや、バンドン非同盟会議(1955)とその後についても話した。「構造的暴力」論を契機に、「平和の文化」への国際的な意識の高まりについてもふれた。

人権については世界人権宣言から人権規約（条約）へ、そして女性、障害者、子どもの権利条約への発展の意味について述べ、とりわけ子どもの権利については、それを実現するための国連子どもの権利委員会CRCの活動と各国政府およびNGOの動きの比較研究が重要であることを、日本の場合を例に挙げながら提起した。

とくに共生の思想については時間を割いた。私はまずそれを *kyosei* と書き、フランス語や英語では *vivre ensemble*, *live together*, *conviviality* あるいは *symbiosis* にあたるが、共生は人と人の関係だけでなく、人間と自然の関係も強く意識されている言葉であり、アニミズム的な、あるいは仏教的な言葉であること、人間性とは *human nature* つまりは人間をつらぬく自然であり、生者は死者と共生していると考えられてきたことを説明し、とりわけ3.11以後にはこのような感覚が共鳴しあい、共有されてきていることも話した。

また、文化の多様性に関しては、個別性と普遍性の関係の捉え直しが求められているとして、「これが普遍である」とはだれも言うことはできないが、それは相対主義に組することではないことを明らかにし、個別性をつらぬいて普遍性へと開かれていく、そういう普遍的なものへの存在感覚が大事ではないかと述べた。民族衣装をまとい堂々と発言するアフリカの人たちに尊厳を感じ尊敬の念を抱くとは、アフリカのなものへの関心と敬意、民族的アイデンティティを尊重することであり、そして、個々人への尊敬の念を通して人間の尊厳を感じとることではないか。あるいは、ノーベル文学賞の受賞者=大江健三郎の文学の普遍性は、彼が常に回帰する故郷松山の森のそれであり、障害を持って生まれた息子の光君との共

生体験から紡ぎ出されヒロシマと沖縄を通して発信される言葉のなかにあるのではないか。抑圧された者に共通する人間としての感情 (le sentiment humain) とそれをつなぐ開かれた理性 (la raison ouverte et universelle) の働きとが、個別性と普遍性をつなぐものではないのか、と話した。

世界に広がる格差、貧困、そして環境問題も、すべて地球上の人と人、そして人間と自然の共生の問題である。貪欲な経済成長主義は格差を拡げ、自然を破壊し続けてきた。ローマクラブそしてドネラ・メドゥズらによって成長の限界が指摘され (1972) て久しいが、今や限界を超えたと警告され (ドネラ・メドゥズ, 他『限界を超えて: 生きるための選択』ダイヤモンド社), 脱成長 (décroissance) が主張されるにいたっている (セルジュ・ラトゥーシュ『脱成長』白水社文庫クセジュ新書)。グローバリゼーションは世界に格差をひろげたが、豊かな国のなかにも格差を拡げ、昨 2011 年米国や英国では「我々は 99 パーセントだ」という抗議と連帯の運動が広がった。グローバリゼーションは地球時代のネガティブな現象であり、それをいかに克服するかということこそ、目前の、最大の課題だと言える。

グローバリゼーションに国境は無く、多国籍金融資本が世界を支配する。貪欲で横暴な資本の活動を掣肘するためには、ナショナルインタレストの視点をつなぐ国際的連帯が求められている。それを globalism に対抗する新しい inter-nationalism と言えるのではないか。

さらに成長神話が問い直されるなかで、豊かさとは何か、人間にとっての幸せとは何かが問い直されているのではないか。そこで私は日本に古くからある清貧の思想についてふれた。「清貧の生き方」を Vivre honnête, juste, et pauvre (誠実で慾ばらず貧乏な生活) と説明したのだが、どこまで理解してもらえたかは分からない。Ascetism (禁欲主義) とどう違うのかという質問も受けた。これから深めたい課題だと思う。

スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマと原発事故の続くなかで、安全神話は崩れ、No Nukes! の声も広がっている。なぜ反対か。私はフクシマについて話し、事故の巨大さ、使用済み核燃料の処理方法が未解決、加えて地震と津波の多い日本列島はそもそも立地条件を欠いている、と反対理由を述べたのだった。

さらに核抑止力神話も崩壊しているのに、ヒロシマ・ナガサキを経験し 9 条を持つ日本で、軍事基地が集中する沖縄についてふれた。成長神話、安全神話、核抑止力神話という「現代の神話」から脱却するための思想と国内的・国際的戦略が必要であり、そこで新しい連帯の思想が求められていること、その軸となるのは弱い者・抑圧されている者の人間的感情であり、それを結びあわすのは「開かれた理性」ではないか、と語った。

イタリアの友人パンパニーニ氏が、彼は私のフランス語のスピーチを英語に通訳してくれていたのだが、通訳の役割を超えて、いま米国がイタリアのシチリア島で進めようとしているスーパーレーダー基地は地中海地域全体にとって脅威となる、その反対運動を拡げた

いと語ってくれた。

最後に、フランスでよく知られたプロテストシンガーで、私の好きなジャン・フェラのシャンソン「カマラド」という曲、これは1968年のプラハの春を武力で押しつぶしたソ連に対する、Camarade (同志)の裏切りに対する、痛烈な抗議の歌なのだが、これを紹介し、もう1曲「ラ・モンターニュ」(山)を、チュニジアにいるからには「カルタゴの山 La montagne の秋がジャスミンの春と同じように美しくあれ」と替えて歌ったのだった。会場にハミングが広がったのも、うれしいことだった。

地球時代にふさわしい世界を！ これを最後の言葉とした。

(原文は、2013.7 記)

### 筆者プロフィール

堀尾輝久 (ほりお・てるひさ)

1933年、福岡県生まれ。東京大学名誉教授。専門は、教育学・教育思想史。

東京大学法学部政治コースを卒業の後、同大学院人文科学研究科教育学専攻に進み、教育学博士。法学部では丸山眞男(政治学)、大学院では勝田守一(教育哲学・思想)、フランス留学ではモーリス・ドベス(発達教育学)に師事した。

東京大学教養学部、ついで教育学部で教え、大学評議員や教育学部長を務めた。

日本学術会議会員、日本教育学会会長、総合人間学会会長、等々を歴任。

2015年設立された「9条地球憲章の会」の代表 <https://www.9peacecharter.org/>  
地球平和憲章の制定をめざしている。

著書多数の中から、読みやすいものを8点だけ挙げる。

『子どもの権利とはなにか 人権思想の発展のために』岩波ブックレット、1986.

『教育入門』岩波新書、1989年.

『人権としての教育』岩波書店 同時代ライブラリー、1991.

『現代社会と教育』岩波新書、1997.

『地球時代の教養と学力：学ぶとは、分かるとは』かもがわ出版、2005.

『人間と教育 堀尾輝久対話集』かもがわ出版、2010.

『未来をつくる君たちへ “地球時代”をどう生きるか』清流出版、2011.

『地球平和憲章：日本発モデル案』花伝社 ブックレット、2021.

### 堀尾さんにご登場を願った経緯と謝辞 (板垣雄三)

私は、むかし東大駒場キャンパスでともに働き／いま地球平和憲章の提案の推進者として注目している／堀尾輝久さんが、2012年秋チュニジアの地中海に面した美しい観光都市ハンマーマートで開かれた地中海諸国の教育学者たちの国際会議に招かれて講演をおこな

い、その概要が、『中央大学人文科学研究所紀要』第78号(2014年)に掲載された「総合人間学への道 人間とは何か その総合的認識をもとめての私の歩み」(もともとは総合人間学会の電子版論考を転載)の中の4-3)として収録されていることを、最近になってようやく知りました。

講師が独唱して終わる講演は地中海的でステキですが、堀尾さんが説く個別性と普遍性の結合はまさにイスラームの基本であるタウヒード(多即一、多元主義的普遍主義、ネットワーク)の教えであり、これを生き方の原則とするムスリムたちも参加する会場で、堀尾さんの講演がどう聴かれたか、想像するだけで心躍るものです。しかも前年、日本の原発事故も影響して、環地中海の民衆の立ち上り(南側では「アラブの春」市民決起、北側ではスペインの「憤激者たち」の都市広場占拠が各国に波及)が地球的に拡大した名残りがまだ漂う時期だったのです。そのとき日本からの「地球時代」の問題提起は、どのように受け止められたらどうかを考えてみるのは、信州イスラーム世界勉強会にとって面白い課題でしょう。堀尾さんがハンマーマートで講演したのと同じ週に、私は上海ビエンナーレに招かれて、東アジアにとってイスラーム文明はどのような意味をもつかについて語っていました。それはその年8月・9月に尖閣国有化問題をめぐり中国全土で高揚した反日デモが終息した直後でした。それだけに、堀尾さんの文章は私にとって感慨深いものです。私の気に入っているハンマーマートの海浜が懐かしいだけではありません。

堀尾さんに、信州イスラーム世界勉強会のe定例会記事として転載をお許し願えないか相談したところ、快諾をいただきました。学会向けに書かれている箇所は、市民向けに調整すること(標題からはじめて、外国語の部分を分かりやすく変えるなど)も、認めて下さいました。フランス語や英語の勉強も少しはできる構造になっています。多々ご配慮をいただいた堀尾さんに心より感謝します。

なお、さらにフランス語の講演原稿全文(17頁、127KB)を、辞書と首っ引きでも読んでみたいという熱心な方には、勉強会事務局に申し出があれば、そのファイルを電子的に送ることもお許しをいただいていること、申し添えます。以上